

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Hiroharu Fujioka

1977年、伊賀上野に三代続く老舗に生まれる。伊賀くみひもでは最年少で伝統工芸士となった母・恵子さんに弟子入り。現在は尊敬する師の背中を見ながら、技の研鑽に励み四代目として家業を担う。



伊賀くみひも

三重県伊賀市の伝統的工芸品で、手で組み上げる「手くみひも」の生産量は全国の約9割を占める。奈良時代に伝来し、鎌倉から江戸期にかけて武具に用いられるが、明治後半より高級帯締めとして知られるようになった。



日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットで

アットホーム明日への扉

検索

TV番組

ディスカバリーチャンネル (CS)



冠番組

「アットホーム presents 明日への扉」放映中

毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!

最新号のご案内 好評公開中

No.052 / 駿河雛人形師 望月 勇治 氏

伊賀くみひも職人

藤岡潤全氏

優美な趣と
絶妙の締め心地を極める。

城下町の面影が色濃く残る、三重県伊賀市に伝わる伊賀くみひも。絹糸や金銀糸など数10本の糸を組み、紐に仕上げた伊賀くみひもは、かつて忍者や武士たちに使われていた物。それが長い時を越え、着物の装いに華を添える帯締めや、羽織紐として受け継がれてきた。機械組みも多いが、手では出せない趣や締め心地があるため、手組みの価値は高い。

藤岡潤全さんは、伝統文化の継承に挑む若き職人。老舗の長男として生まれたが、初めは跡を継ぐつもりはなかったという。しかし、何気なく手伝ったことから家業の奥深さに魅せられ、伝統工芸士である母に弟子入り。それから一途に修業を積んできた。

仕事への思いは？

藤岡「現代では帯締めはあまり重要視されていないと思うので、そんな風潮

を何とかして変えていきたいですね。大げさに言えばそれが自分の使命であり、やる気の一つになっています」

さらなる高みを目指して挑むのは、漣なみという柄。小さな波の連なりをわずかな幅の中に表すこの柄には、緻密な技が要求される。使う糸は68。通常より数が多く、数が多いほど難しい。

高台と呼ばれる組台に座り、「綾」を取る。左右に張った糸の間を縫うようにして目当ての糸を次々選び取り、斜めに交差させていく作業だ。この斜めに交差させるところが、縦糸と横糸を直角に組み合わせる織物と、伊賀くみひもとの違いである。

綾を取るたび、ヘラで交差部分を打ち込み、組目を整える。打つ角度や力加減が少しでも狂えば、優美な趣とともに帯締めの命である、硬すぎず、柔らかすぎない締め心地が失われてしまう。

手応えは？

培った技を注ぐこと、一週間余り。繊細な漣が引き立ち、締め心地の良い帯締めが組み上がった。

藤岡「師匠に『二つ前に進んだ』と言ってもらえたのが、何よりも嬉しいですね。しかし自分には課題が山積みで、ほっとするわけにはいきません」

ひたむきな努力は、厳しい師匠の口から温かな言葉を呼んだ。その言葉に甘んじることなく、さらに上を目指す若き職人はやがて、伊賀くみひもの未来を担う存在となるだろう。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2012年9月取材掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!
美しさと使いやすさを求め、日々努力する姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。